



火山防災対策はようやくスタートライン 恵まれた美しい自然を次代に伝える

千尋
Chihiro

富士山の麓で生まれ育ち、あまりに身近な存在であるためかこの山が特別な存在という認識がどうも薄いかもしくない。とはいえ厚い雲に覆われて見えなくとも、どの位置にどのくらいの大きさでそびえているか、ふるさとの景色はよくわかる。

富士山は単なる自然の山ではなく、信仰の対象や芸術作品の源泉などとして、日本文化に大きな影響を与えている。こうした普遍的な価値が高い評価を受け、二〇一三年に国連教育科学文化機関（ユネスコ）世界文化遺産に登録された。この十数年で文化財の整備などが進み、富士

山を守ろうとする意識も高まっている。

一方で、観光客が増加し環境保全の面で問題が生じているのも事実。登山道の混雑防止などを目的に、今年の夏山シーズンは山梨、静岡両県とも一人四〇〇〇円の入山料（通行料）と、午後二時から翌日午前三時までの通行規制を導入した。更に静岡県では五合目以上の登山者に対し、富士山の環境保全や安全な登山に関するルールとマナーの事前学習を義務付けている。

富士登山を毎年の行事にしている知人が今年も無事に登頂を果たした。混雑状況を聞くと「例年通り

人は多かった。特に外国人が目立つが、以前のような半袖半ズボンという人は見かけず、安全な登山を呼び掛けている成果だろう」と話していた。

人に装着し歩行などを補助するロボットの開発を手掛ける中国の新興企業が、山登りをサポートする登山支援ロボを富士山に導入しようとして動いているという。骨盤付近に取り付けると、センサーで動きを検知し、山道での歩行を補助する仕組み。多少の重さは感じるものの、コンパクトで装着しやすく、万里の長城などで使われているようだ。

山や川のレジャーでは何よりも

に乗って関東の広い範囲に降り注いだとの記録も残る。

これ以降約三〇〇年間噴火はなものの、いつ噴火してもおかしくない状態だと考えられている。富士山の噴火による火山灰の影響範囲は、風向きや噴火の規模によって大きく異なるが、首都圏を含む広範囲に及ぶ可能性がある。特に風の影響で山梨県、静岡県、神奈川県、東京都、千葉県、埼玉県など広い範囲に火山灰が降り積もるとみられている。

二〇二〇年に国のワーキンググループがまとめた報告書によると、富士山で宝永噴火に相当するような大規模な噴火が起きた場合、道路や建物などに降り積もる火山灰の量は約四・九億立方メートルに達すると試算している。これは東日本大震災に伴う災害廃棄物量の約十倍、東京ドームの四〇〇杯分に上る膨大な量だ。火山灰は人命にすぐに影響を与えるわけではないが、のどや気管支の痛みといった健康被害が

出る懸念がある。また交通に支障が生じるほどの視界悪化も想定される。

富士山などで大規模な噴火が発生して首都圏に大量の火山灰が積もった時、社会全体はどう対応するのか、火山や防災の専門家などをつくる国の検討会が三月に方針を取りまとめている。それによるとまずは生活をつづけるために必要な道路や線路に積もった灰などを優先的に取り除くとしたうえで、仮置き場の候補地も事前に決めておくことが望ましいとしている。最終的な処理の方法は再利用や資源化、土捨て場などでの処分、埋め立て、海への投入などを挙げ、複数の手段を組み合わせることが必要とし、国や地方自治体などが連携して処理する必要があると指摘している。

火山災害警戒地域に指定される全国二三の都道府県でつくる「火山防災強化推進都道県連盟」が七月に青森市内で総会を開き、政府への要望事項を決めた。火山灰の最終処分

場の選定や海洋投入への柔軟な対応といった法整備に加え、自治体の負担軽減策を求めた。

広域降灰はほとんど誰も経験していない事象だ。備えも国民の理解も進んでいない。噴火が始まってからでは対策できないだろう。火山防災対策はようやくスタートラインに立ったところ。平時から準備を急がなくてはいけない。

貴重な労働力という 認識を持つ

静岡県では駿河湾の地震や富士山の噴火などに備え、県民の防災意識が高いと聞いたことがある。確かに高校生まで静岡県で暮らしていたこともあり、九月一日の防災の日をはじめ様々な機会に防災訓練を経験してきた。防災訓練の参加率が全国で最も高いそうだ。地域を挙げて防災訓練に真剣に取り組んでいる。全国各地でそうあってほしい。

日本列島は地震や水害、津波な

「安全」が優先されなければならない。新しい技術やサービスが様々な人の「安心」材料となるような展開にも期待したい。

東日本大震災の十倍の 膨大な量

富士山が過去に何度も噴火を繰り返している活火山であるということとを忘れてはいけない。最後の噴火となる一七〇七年の「宝永噴火」は約二週間にわたって断続的に続き、大量の火山灰や火山礫を噴出。噴火期間を通じて高さ一五キロメートルの噴煙が立ち上がり、火山灰は偏西風

ど様々な災害が起こる。いざという時に動ける労働力が必要であり、それを担うのが地域の建設業だ。平時はそれぞれの仕事に従事し、非常時には具体的に動ける人たちの集団となる。そういう貴重な労働力であるという認識を国民全体で持つ必要がある。その労働力を常に確保しておくために、公共事業を持続的に供給する。そういう考え方が国策としてあってもいいはずだ。

この国では災害を受け止め、自然の恐ろしさを感じながら生きなければいけない。しかし平時は季節の変化に富み、四季それぞれの魅力を感じ、楽しむことができる。なかでも富士山は国内外で存在感がひときわ大きくなっている。恵まれた美しい自然を、次代にしっかりと伝えていかなければいけない。